

コ、エルパソ等を回り、アメリカに再入国し南部のテキサス、フロリダを回ってニューヨークへ行った。ニューヨークで一月過ごして四月十一日、行きと同じ竜田丸にて帰国した。帰国後、「工芸の輸出——その根底の大きな問題——」（『報知新聞』）、「メキシコに於ける工芸事情」（『東京工芸』）、「メキシコの工芸に就て」（『輸出工芸』）、「汎工芸」に昭和十六年九月から「外游雜稿」を六篇連載（いずれも『高村豊周文集』Ⅲに収録）等、講演録や隨筆を發表、『自画像』にも詳しい。

なお、商工省より支給された旅費を儉約してメキシコの物品を蒐集し、メキシコのモデルルームを工芸指導所の中に作った。しかし、それらは戦災で灰燼に帰した。帰国後、高島屋でメキシコの工芸品を陳列したこともあった。アメリカでは喫煙具を集め、商工省に皆納めた。商工省に報告書を書いたという記述もあるが、報告書は現在、所在が不明である。なお、昭和十一年から毎年、同十七年まで商工省主催の工芸展が輸出工芸展覧会、輸出工芸図案展覧会、工芸品輸出展覧会と名称を変えながら開催され、豊周はその審査員を務めていたが、戦争が激しくなり中止され、メキシコの日本工芸展覧会も実現しなかった。

⑬ 紀元二千六百年奉祝美術展覧会

昭和十五年、文部省は挙国一致の国策を推進する一助として文展の代わりに紀元二千六百年奉祝美術展覧会を開催することとした。期間は前期が十月一日から同二十二日まで、後期が十一月三日から同二十四日までとし、会場は東京府美術館が充てられた。文部省と

紀元二千六百年奉祝会の共同主催、内閣紀元二千六百年祝典事務局および東京府協賛というかたちにとられ、作品については文展と同様に第一部・絵画（日本画）、第二部・絵画（油絵、水彩画）、パステル画、素描、創作版画等）、第三部・彫塑、第四部・美術工芸という区分に従って公募することとなり、委員長に細川護立、総務委員に菊池文部次官、歌田祝典事務局長、永井（浩）専門学務局長、岡田東京府知事らが任命された。審査委員は帝国芸術院会員および官展、在野団体の有力作家から選ばれた。その中の本校教官は次の十二名であった。

藤島 武二	清水 亀蔵	南 薫造	結城 貞松
建島弥一郎	和田 三造	津田 信夫	朝倉 文夫
香取秀治郎	小林 万吾	北村 西望	田辺 至

⑭ 献納画の共同製作

「諸新聞切抜」（昭和十五年）を見ると、紀元二千六百年奉祝に関する記事が各紙に大きく取り上げられているなかで、三月一日の各紙に本校生による共同制作のことが報じられている。左記は『報知新聞』の記事である。

よき年の記念に

海軍省と南京總司令部へ献納

紀元二千六百年に卒業する記念として美校卒業生が油繪を共同制作し海陸軍へ献奉する、東京美術學校洋畫科卒業生卅名は二班に分れ海陸兩軍にゆかりのある繪を共同制作する計畫をたて二千六

百年クラス會と名づけて記念制作を行ふこととなり海軍班は早くも海をテーマに七尺五寸に七尺の百五十號の大作を描くことに決定、三日から二週間千葉縣勝浦町漁村道場に立籠り朝晩は道場生と同じく修練して海洋魂を養つた上、書間は素材を集め、魂を打込んだ『海』の繪を描く、道場へ立籠るのは

大柳龍男、益田卯咲、藤本東一^{〔良〕}、益永端、中江泉、樽松正

利、山尾平、田中芳郎、白田輝四郎、元田乾行、乙葉統、森井

龍起

の諸君で海軍省軍事普及部から高橋中佐が指導のため同行する、共同制作は六月一杯に完成、八月十一日から一週間府美術館に飾つた後海軍省に獻納されるが、廿九日午後三時から芝水交社に集まつた一同は

從來海に關する繪畫は極めて少いので今回は波だけをテーマと

した新しい繪を作り上げたい

と張り切つて語つた、なほ陸軍班も同じく共同制作の上南京の司令部〔他紙には司令部將校集會所とある〕へ獻奉する筈

油画科では昭和十一年卒業のクラスが城信義追悼のために共同制作をした例〔福貞〕があるが、今回の制作は進んで国家に奉仕しようという氣持を表したもので、百五十號の海に因む繪と陸に因む繪とを海軍班と陸軍班とが一点ずつ制作した。前者は怒濤を描き、後者は「初夏の子供」と題し、子供たちが輪になって遊んでいる穏やかな情景を描いたもので、前者の下図を描いた藤本東一良氏によれば、ともに写實的な作風で、軍から費用を支給されたとは言え、士

氣を鼓舞するための戦争画ではなく、銃後の人を慰めるために描いたもので、しかも、誰から指示、指導されたのではなく、生徒たち自ら発案し、完成させたものだという。作品の所在は不明であるが、新聞には次のように報じられている。

結ぶ若き彩管の精進

合作畫『初夏の子供』獻納

今春東京美術學校油畫科を巣立つた青年美術家達が結成してゐる『二六〇〇會』では意義深い年に卒業したことを記念するため陸海軍獻納畫の共同制作を冀ひ、去る三月卒業以來精進してゐたがこの程完成、廿二日正午陸軍省恤兵部に出頭獻納の手續をとつた、この獻納畫に心身を打込んだ若人は

大澤正夫、本城正、興梧武、藤本東一良、大柳龍男、乙葉統、

小野田弘彌、金子徳衛、竹澤基、益永端、宮河久、淺井堅治の

十二名

で童林社小林萬吾畫伯の熱心な指導の下に各自が彩管報國の精神をこめて從來のモニタージニ式を排したブローの形を持つた共同制作『初夏の子供』を完成したもので陸軍では非常に感激し早速南京總司令部に送り劇務に疲れた將兵の眼を、心を慰めることゝなつた

なお海軍には既報の如く同様『怒濤』が獻納された

〔昭和十五年七月二十三日『報知新聞』〕

⑮ 皇紀二千六百年祝典